The Tragedy of Pudd'nhead Wilson と *Tom Sawyer* 続編シリーズ

浅　井　みどり

[キーワード：①*The Tragedy of Pudd'nhead Wilson*; ②*Tom Sawyer Abroad*; ③*Tom Sawyer, Detective*; ④David Wilson; ⑤Tom Sawyer]

序

Mark Twain (Samuel Langhorne Clemens) の *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson* (1894) は，"The Man That Corrupted Hadleyburg" (1899)，*The Mysterious Stranger* (1916) などの後期のペシミスティックな作品の先駆けと評されている。これら3つの作品は，R. R. Male の言葉を借りると "Cloistral Fiction"[1] という形式で書かれており，一人の stranger を送り込むことによって平和で理想的な地域社会に波乱を起こし，上辺を飾っている理想的な姿の下にある，隠された社会の真実を暴くという plot が用いられているのである。

Pudd'nhead Wilson における stranger, David Wilson は，理想的社会の裏側を暴いてはいるが，この問題は付随的に分かる事であり，彼が直接明らかにしているのは「殺人」と「赤ん坊の取り替え」という二つの事件

の真相である。この作品は，“half melodramatic detective story”[2] と評されるように，作中の Wilson は stranger というより detective 的であり，最後には成功して社会の英雄になるなど，他の二つの作品とはかなり様相を異にしている。また，彼は一見，重要な役割を演じているようだが，作中における存在は極めて曖昧である。故に，C. Mann は「英雄」と讃え[3]，E. Alsen は「本物の間抜け」と見なす[4] など，Wilson に対する批評家達の解釈も様々である。また，Twain 自身は “Only as a piece of machinery”[5] と述べ Wilson の重要性を否定しているが，この言葉をそのまま受け取るか否かについても論議を呼んでいる。

この小論では，まず不可解な存在の Wilson という人物を解明することから始める。そして，彼が同じ plot を持つ後期の作品の主人公達より，むしろ初期の作品の代表的な登場人物の一人である Tom Sawyer と接点を持ち，互いに影響し合っていることを見出すと共に，*Pudd'nhead Wilson* が，*Tom Sawyer Abroad* (1894)，*Tom Sawyer, Detective* (1896) という，失敗作と評して，Twain の作品の中でもとかく無視されがちな作品と深く関わりを持っているということを明らかにしていくことを目的とする。

I

最初に付けられた Pudd'nhead というあだ名のために，優れた才能を持ちながらも 20 年余り不遇の生活を強いられたということは，Wilson にとっては悲劇と言えるであろう。しかし，悲劇的な背景を背負っているにもかかわらず，彼は悲劇の主人公には見えない。stranger であり，悲劇から成功へ向かって行く Wilson は，反対に悲劇へと向かって行く他の登場

人物達とはかなり異質の存在である。それにもかかわらず彼の存在が曖昧に感じられるのは何故だろうか。その原因の一つは，Pudd'nhead というあだ名にあるといえる。このあだ名の意味について M. L. D'Avanzo は，経済的にも政治的にも失敗したことを意味し，人生の敗北者を示していると述べている。[6] つまり Wilson は，このあだ名によって David Wilson として生きていく術を全て失ってしまい，替わって Pudd'nhead Wilson として，本来の自分ではない姿で生きていかなければならなくなったのである。こうして，彼の本当の自己は Pudd'nhead という仮面の下に隠されてしまったわけである。Wilson の本質が読者から見え難くなっているのはこのためといえる。先に，Twain が Wilson について，"a piece of machinery" と述べていたが，確かに，その存在に色が無ければ無い程，いかなる状況にも容易に組み入れられ，自由に操ることができるという事を考えると，彼の言葉の意味も理解できる。表舞台で存在を誇示することはないが，いつも何かに関わっている，それが Wilson の描かれ方なのである。

しかし，単に "a piece of machinery" の理由から，Twain は Wilson に Pudd'nhead というあだ名を与えたのであろうか。後半に彼の急速な出世劇が用意されていることを考え，Wilson の不遇の日々を，E. Alsen は，"David Wilson's twenty-three year fight for popularity and power"[7] と述べている。Twain は，あだ名を隠れ蓑にさせ，David Wilson に成功に向かっての準備を着々とさせていたというわけである。確かに Twain はこの "fight" のために，Pudd'nhead というあだ名の下に Wilson に様々な利点を与えている。先ず，町の人々に関する彼の情報収集は，誰にも気付かれることも妨害されることもなく，非常に順調に行われている。また，最終的には重要な情報となる指紋収集という奇妙な趣味に関して

も，誰からも深く詮索されていない。更に，彼は冒頭で追放状態にされてはいるが，取るに足らない存在，つまりは無害な存在と見なされ，町の人々に嫌われてはいない。これらは全て，あだ名がもたらした利点といえる。このように彼は，公には実力を隠しながらも町の権力者など一部の人々には才能を認められ，それらが上手く相乗効果をもたらして町という地域社会に入り込むことに成功しているのである。勿論，始めから批判的な目を持つ彼は，町の人達と同じ視点で物事を見てはいるが，そこに巻き込まれることはない。また，近くにいながら，実は遠くから批判的に眺めているということも，誰にも気付かれることもない。あだ名が彼にもたらした恩恵はかなり大きなものであったといえるのである。

II

元々，stranger の役割も担っている上に知性も教養も与えられていた Wilson は，正確な情報を冷静に判断し，社会の外観と実体の矛盾に気付いていく。そこで彼は，町の人達が誇りとし，町全体の社会基準にもなっている権力者達の歪んだ価値基準を利用して，ついには政治的な力をつけ始めていく。この後の彼は突如，自己主張をし始め，隠していた才能を披露するが如く活躍するのである。そして，最後の裁判では大勝利を収め，名実共に町の指導者へと上り詰めていくのである。丁度，第 13 章の終わりから始まる Wilson の出世劇は，あまりにも急速で華々しい為に，悲劇というタイトルを考えると，やはり何か不自然さを感じるのである。これもまた Wilson という人物を不可解な存在にさせている原因の一つといえる。結局，Twain が Wilson に与えた悲劇というのは，周りの勝手な判断が原因で，才能を開花させるまでに長い不遇の日々を強いられたという

ことであった。よって，前半部の彼は，Pudd'nhead として自己を隠していた為に，読者には曖昧な存在にしか映らなかった。反対に，第13章の終わり位からの彼は，野心家で，自分の成功の事しか考えていないように映る。明らかに，Wilson の描き方において変化が生じていると言える。特に裁判の場面では，政治的地位も得，事件の真相も完全に突き止めていたので余裕さえ見える。彼は発言を焦らしたり，犯人が判明する時間を設定したり，裁判をより劇的なものにすることに力を注いでいる。様々な効果を狙いながら華々しく英雄になることに熱中する姿は，まさに Tom Sawyer にそっくりである。Wilson と Tom の類似について L. Fiedler は，"Pudd'nhead is Tom Sawyer grown up, the man who has not surrendered with maturity the dream of being a hero"[8] と述べている。他にも，R. Chase,[9] J. H. Schaar[10] といった批評家達がこの点を指摘している。

III

Wilson と Tom の結びつきは，*Pudd'nhead Wilson* の執筆過程を見ることによって，より明らかになる。Twain は，出版業のパートナーである Fred J. Hall に宛てた 1892 年 8 月 10 日の手紙の中で，*Tom Sawyer Abroad* の執筆を開始したことを知らせると同時に "I have dropped that novel. . . ." という記述を残している。このことに関して A. B. Paine は "that novel" とは *Pudd'nhead Wilson* の前身となる "Those Extraordinary Twins" (1894) のことだと指摘している。[11] そして，9 月 4 日の手紙では，*Tom Sawyer Abroad* の完成と保留状態にしていた "Those Extraordinary Twins" の執筆を再び開始したことを知らせている。[12]

Tom Sawyer Abroad と "Those Extraordinary Twins" は，ほぼ同時期に構想が練られ執筆されていた。しかし，完成までの過程は異なり，*Tom Sawyer Abroad* は一気に書かれているのに対して，"Those Extraordinary Twins" は途中で中断されている。Twain が *Tom Sawyer Abroad* を一気に書き上げた理由としては，出版当初から "It is more decent to parody Jules Verne...."[13] と指摘されている通り，Verne の *Cing Semaines en Ballon* (1863) の plot に負うところが多く，比較的容易に書き上げたということが推測できる。一方 "Those Extraordinary Twins" は，作品の長さの面で不都合が生じ，再び中断することになる。その後，娘 Clara に宛てた 11 月 16 日の手紙では執筆再開を，[14] Hall 宛ての 11 月 24 日の手紙では先の中断の原因となった長さの問題を解決したことを知らせている。[15] そして，12 月 12 日の手紙ではついに完成したと述べてあり，再開後はほぼ一気に書き上げた事が分かる。しかしその一方で，次のように語っている。

> The last third of it suits me to a dot. I begin, to-day, to entirely re-cast and re-write the first two-thirds....[16]

前半部を書き直さなければならない異変が作品の中で起こっていたのである。この異変について，Twain は，"Those Extraordinary Twins" の序文の中で，作品の長さを延ばしたために喜劇から悲劇に変わってしまったと説明している。こうして当初の意図とは違う方向に向ったために半ば偶発的に生まれた作品が *Pudd'nhead Wilson* なのである。

前半の 3 分の 2 以上の修正を強いることになったにもかかわらず，Twain が固執した後半の 3 分の 1 というのは，*Pudd'nhead Wilson* を単純に割ってみると，第 14 章から最終章までに相当する。そして，この部分というのは，先の Wilson の解釈の所で既に述べたが，丁度 Wilson の

出世劇が展開される部分であり，その様子が Tom Sawyer と重ねられる箇所でもある。

ここでもう一度，執筆中に書かれた Twain の手紙に戻り，先ずは，作品の長さに関する彼の言及に注目してみたい。11 月 24 日の手紙には "I have now written 43,000 words on it. . . ."[17] とあり，また 12 月 12 日の手紙には "I finished 'Those Extraordinary Twins' night before last—makes 60 or 80,000 words. . . ."[18] と記述されている。Twain は，この 18 日間で 17,000 から 37,000 語書き上げており，その語数から判断することによって，この部分は後半の 3 分の 1 に相当するということが明らかになる。次にもう 1 点注目しておきたい記述がある。11 月 24 日の手紙には，"Those Extraordinary Twins" が順調に進んでいることを知らせると共に，次の様なことも述べている。

> I could write Part II of it, and then, whether they wanted Part II or not, we could add it to the book when we issue.[19]

it というのは *Tom Sawyer Abroad* のことであり，they というのは *Tom Sawyer Abroad* を最初に発表した *St. Nicholas Magazine* の編集者達を指している。この手紙から，Twain の *Tom Sawyer Abroad* の続編に対する強い意気込みが感じられる。この時期，彼は "Those Extraordinary Twins" を書く一方で，再び Tom が活躍する作品の構想を練っていたのである。

以上の事柄を総合すると，後半の 3 分の 1 を書いていた時，Twain の頭の中には Tom の新しい作品に対する強い願望があった為に，Wilson に Tom の姿を重ねてしまったと言えるのである。また，その事が後半の執筆の弾みになったとも考えられる。Tom に対する Twain の思い入れを考えると，Wilson を悲劇的状況に陥れる一方で，様々な恩恵を与え最

後に華々しく成功させたことも納得できるのである。

IV

Wilson と Tom の結び付は他にもある。1893 年 12 月からの *Century Magazine* における連載に至るまで，*Pudd'nhead Wilson* はかなりの修正が加えられた。まず始めに，Twain が完成時に指摘していた前半 3 分の 2 の修正については，*Pudd'nhead Wilson* の冒頭にある "A Whisper to the Reader" の中で，翌年の 1 月 2 日に完成したと記されている。しかし，1 月 24 日と 28 日の手紙には，作品の出来ばえに満足できず，出版するか否か迷っているという記述がある。[20] Twain は一つの作品の中に二つの物語が存在し，互いに妨げあっていることに気付いたのである。修正は，その後暫く暗礁に乗り上げたままであったが，7 月 30 日には最後の大修正が行われたことが記されている。[21] つまりこの時点で，Twain が "Those Extraordinary Twins" の序文で，"I pulled one of the stories out by the roots. . . ."[22] と説明している "literary Caesarean operation" が行われ，ようやく現在ある *Pudd'nhead Wilson* と "Those Extraordinary Twins" という 2 つの作品に分かれたというわけである。

Pudd'nhead Wilson の修正が暗礁に乗り上げていた 1893 年 4 月 5 日の娘 Clara に宛てた手紙に，Tom 達の新しい物語のアイディアが記されている。[23] Twain は *Tom Sawyer Abroad* の 2 巻目を出版することに意欲的であったので，当然のことだろう。彼の当初の予定は，Tom に様々な国を旅させることによって *Tom Sawyer Abroad* をシリーズ化させることであった。しかし，ここで彼が考えているアイディアは，殺人事件の真相を解き明かすといったもので，その狙いとは掛け離れているように見え

る。むしろ *Pudd'nhead Wilson* の影響を受けてのものだと考えられるのである。

このアイディアは後に，*Tom Sawyer, Detective* という作品に育っていく。この作品が *Tom Sawyer Abroad* 同様に失敗作と見なされている原因の一つは，D. M. McKeithan が指摘しているように，[24] この作品はデンマークの作家，Steen Steensen Blicher の *The Parson at Vejlby* から main plot を借りて書かれたものであり，Twain のオリジナルとは言い難い点にある。しかし，Twain の始めのアイディアはしっかり生きている為に *Tom Sawyer, Detective* は *Pudd'nhead Wilson* と様々な共通点を有している。南部の奴隷制の町，殺人事件，変装，裁判，detective の役割をする主人公等，明らかに *Pudd'nhead Wilson* の影響を受けているということが分かる。

Twain は *Tom Sawyer Abroad* を書き上げた時，そのシリーズ化を考えていた。しかし，結果として *Tom Sawyer Abroad* に続いたのは *Tom Sawyer, Detective* という全く様相を異にするものであった。つまり，彼の関心は別の方向——detective story——へ向かって行ったのである。実際この後，Twain は "Tom Sawyer's Conspiracy" (1897-1900)，"A Double-Barreled Detective Story" (1902) 等の detective story を残している。

Twain にとって Tom は彼が生んだ最高の登場人物であり，常に英雄でいる必要があった。Twain は，Tom が登場する作品には，必ず彼が英雄的行動を行える舞台を設定しており，また，その舞台をずっと探し続けてもいたのである。Twain は，*Pudd'nhead Wilson* を書き上げた時，*The Adventures of Tom Sawyer* (1876) の中で，殺人事件の裁判で証言した Tom の姿を思い出したのではないだろうか。そして今度は，単なる

証人では無く，Wilson のように自ら事件を解き明かす detective の役割を与え，最後に劇的な裁判の場面を設定すれば Tom が再び英雄に成ることができる，そう考えた Twain は，新しい Tom の物語を detective story へと変更していったのである。つまり，*Pudd'nhead Wilson* は *Tom Sawyer, Detective* 執筆への大きな動機となったと考えられる。

結

ここまで述べてきたように，*Tom Sawyer Abroad* は *Pudd'nhead Wilson* 執筆の勢いを与え，*Pudd'nhead Wilson* は *Tom Sawyer, Detective* に執筆の動機を与えるなど，この三つの作品は密接な関係で結ばれていた。Tom から Wilson へ，Wilson から Tom へという構図を見ると，Twain の最愛の Tom と深い関わりを持つ Wilson は，確かに始めは "a piece of machinery" であったかもしれないが，それ以上のものになったのではないだろうか。当時 Twain は，自動植字機への盲目的投資，経営する出版社の不振等，経済的苦境にあった。何とか巻き返しを狙っていた Twain にとって，苦境を脱して成功する Wilson の姿は，彼の願望そのものだったと考えられる。

Twain は 1868 年のノートブックに，盗んだ気球でパリから逃亡してきたフランス人囚人の物語の断片を書き残している。[25] おそらくこれが，気球をモチーフにした作品の最初のアイディアであろう。また彼は，1869 年に *Pudd'nhead Wilson* の前身である "Those Extraordinary Twins" のモチーフとなった "The Siamese Twins" というスケッチを残している。Twain の中で 20 年間，この二つのアイディアは暖められ，ほぼ時を同じくして，*Tom Sawyer Abroad* と *Pudd'nhead Wilson* という作品に

なって世に出されるわけだが，偶然とはいえ，ここにも深い繋がりを感じるのである。

註

1 Roy R. Male, *Enter, Mysterious Stranger* (U of Oklahoma P, 1979)
2 Leslie Fiedler, "As Free as Any Cretur...," *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, ed. Sidney E. Berger (New York: W. W. Norton & Company, 1980), 220.
3 Carolyn Mann, "Innocence in Pudd'nhead Wilson," *Mark Twain Journal* 14-3 (1968-69), 18-21.
4 Eberhard Alsen,"Pudd'nhead Wilson's Fight for Popularity and Power," ed. Berger, 324-332.
5 Mark Twain, *The Love Letters of Mark Twain*, ed. Dixon Wecter (New York: Harper & Brothers, 1949), 291.
6 Mario L. D'Avanzo,"In the Name of Pudd'nhead," *Mark Twain Journal* 16-2 (1971-72), 13.
7 Alsen, 325.
8 Fiedler, 228.
9 Richard Chase, "The Inadequacy of *Pudd'nhead Wilson*, "ed. Berger, 244.
10 John H. Schaar, "Some of the Ways of Freedom in *Pudd'nhead Wilson*," ed. Susan Gillman et al. (Durham: Duke U P), 217.
11 Mark Twain, *Mark Twain's Letters*, ed. Albert Bigelow Paine (New York: Harper & Brothers, 1917), II, 565-6.
12 Mark Twain, *Letters to His Publishers 1867-1894*, ed. Hamlin Hill (Berkeley: U of California P, 1967), 318-9.
13 E. K. Chambers, "Rev. of *Tome Sawyer Abroad*," *Mark Twain: Critical Assessments*, ed. Stuart Hutchinson (East Essex: Helm Information, 1993), II, 221.
14 Twain, *Love Letters*, 262.
15 Twain, *Letters to His Publishers*, 326.
16 Twain, *Letters to His Publishers*, 328.
17 Twain, *Letters to His Publishers*, 326.

18 Twain, *Letters to His Publishers*, 328.
19 Twain, *Letters to His Publishers*, 326.
20 Twain, *Letters to His Publishers*, 332-4.
21 Twain, *Letters to His Publishers*, 354-6.
22 Mark Twain, *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, ed. Berger, 119.
23 Clara Clemens, *My Father Mark Twain* (New York: Harper & Brothers, 1931), 106.
この手紙には日付が無いが，個々の出来事を Paine が残している記録と比較し筆者が特定した。
参照：Albert Bigelow Paine, *Mark Twain: A Biography, The Writings of Mark Twain* (Tokyo: Hon-no-Tomosha, 1988), 32, 964.
24 Daniel Morley McKeithan, *Court Trials in Mark Twain and Other Essays* (The Hague: Martinus Nijoff, 1958), 169-171.
25 A. B. Paine, *Mark Twain's Notebook*, (New York: Cooper Square Publishers, 1972), 119-122.

要　　約

Mark Twain の *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson* における登場人物の一人である David Wilson は，一見，重要な役割を演じているように見えるが，作品における彼の文学的意味は非常に見極め難く，彼に対する批評家達の意見も実に様々である。

作品の中で，Wilson は実に曖昧に描かれている。作品の前半 3 分の 2 の部分では，Pudd'nhead というあだ名の下に，その存在を誇示するようには描かれていない。一方，後半の 3 分の 1 の部分では，Pudd'nhead という仮面を外し，急速な出世劇を展開し，最終的には英雄になっている。このように，作中における彼の描き方の変化が，Wilson の存在の曖昧さにつながっているのである。

特に，後半部の Wilson に注目すると，その様子が Twain の作品の中でも最も有名な Tom Sawyer に似ていることが分かる。そこで，*Pudd'nhead Wilson* の執筆過程を見てみると，Twain は，ほぼ同時期に *Tom Sawyer Abroad* の執筆にも取り掛かっており，その影響が，Wilson に及んだと考えられる。Wilson と Tom の関係はこれだけではない。*Pudd'nhead Wilson* は完成までに何度か修正が加えられている。丁度その修正の直中，Twain は Tom 達の新しい作品を考えていた。そして

生まれた作品が *Tom Sawyer, Detective* である。この作品は様々な点で *Pudd'nhead Wilson* と共通点を持っており，明らかに *Pudd'nhead Wilson* の影響を受けていることが分かる。

以上のことから，この三つの作品の関係の深さが理解できる。また，Twain は，妻に宛てた手紙の中で，公には Wilson の重要性を否定しているのであるが，Tom に対する Twain の思い入れを考えると，Wilson も Twain の hero の一人と考えられるのである。

The Tragedy of Pudd'nhead Wilson and Neglected Two Sequels of *The Adventures of Tom Sawyer*

Midori Asai

David Wilson is one of the characters of Mark Twain's *The Tragedy of Pudd'nhead Wilson*. Seemingly he plays an important role, however, strangely it is difficult for us to find out his meaning as a literary character. Therefore opinions are divided among critics on this subject.

In this narrative, Wilson is described very obscurely. In spite of being intelligent, he is nicknamed "Pudd'nhead" and described as a person who is not worth bothering about in the first two-thirds of this narrative. His real talent is hidden under the mask of "Pudd'nhead". In the last one-third, on the contrary, he takes off his mask of "Pudd'nhead" suddenly and he rises to be a hero rapidly. This sudden change in his role leads to Wilson's obscurity in this narrative.

When we focus on the description of Wilson in the last part, we find that he looks like Tom Sawyer, Twain's most famous character. *Pudd'nhead Wilson* was written in the almost same time as *Tom Sawyer Abroad* was written. Thus we see Wilson is greatly influenced by Tom. We can find another connection between Tom and Wilson. After finishing *Pudd'nhead Wilson*, Twain needed to make some revisions in the manuscript. While he did it, he began to plan a new story for Tom, *Tom Sawyer, Detective*. As we can surmise from this title, Tom inquires and reveals the real fact of the case of murder as a detective like Wilson. It is clear that Tom is greatly influenced by Wilson.

We may, therefore, reasonably say that *Pudd'nhead Wilson, Tom Sawyer Abroad* and *Tom Sawyer, Detective* are closely connected and influenced one another. Twain states in his letter to his wife, Olivia, that David Wilson is not

an important character for him. However, a close look at Wilson's connection with Twain's dearest Tom Sawyer will reveal that he is one of the heroes for Twain.

（学習院大学人文科学研究科イギリス文学専攻博士前期課程終了，
淑徳大学非常勤講師）